



【 2022 年度 教会標語 】

「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。

それは朝ごとに新たになる。」

哀歌 3 章 22～23 節 a

2022 年度は、「教会設立 50 周年教会宣言文」の (2) にあたる「常に祈り、奉仕を志します」を主題とします。【2021 年度 (1) 「礼拝を中心にした信仰生活を送り、神様を賛美します」でした。】この主題のもとに、2022 年度は、哀歌 3 章 22～23a 節を教会標語といたしました。

2020 年から始まったコロナウイルス感染により、2年間常に健康の心配や活動の停止などを受け、以前のような日常生活が停止しています。2022 年度は完全な終息をと願いながら、2022 年度の準備をしています。本日 (2022 年 2 月 22 日)、神奈川県では 6,000 人ほどの感染者が出ている状況です。まだまだコロナのために大変な状況に置かれている方々もおります。そのような方々にも、キリストの復活の希望の光が届くように、また私たちの歩みが希望の光を証しすることができるようにと祈ります。

2022 年度の教会標語は、旧約聖書の哀歌からです。哀歌とは「悲しみの歌」という意味のごとく、王国滅亡の悲慘が歌われています。しかし「哀歌」は、その悲慘の中に輝く光をテーマとして作られています。単に悲慘さと嘆きが語られているのではなく、悲慘さの中心に希望の光があることを語っているのです。

そのため、哀歌の文章構造もヘブライ語のアルファベット順に文章が作られています (各節の冒頭の言葉の頭文字がアルファベット順に作られています。1～4 章まで)、その真ん中に希望の光となる言葉が置かれています (3 章であれば、22～23 節がそれにあたります)

哀歌は、一貫して悲慘と嘆きを語っています。具体的には、エルサレムがバビロニア帝国によって陥落し、ユダ王国が滅亡した出来事が語られています。その悲慘さが 2 章 20～21a 節では下記のように語られています。

20 主よ、目を留めてよく見てください。

これほど懲らしめられた者がありませんか。

女がその胎の実を 育てた子を食食物にしているのです。

祭司や預言者が 主の聖所で殺されているのです。

21 街では老人も子供も地に倒れ伏し

おとめも若者も剣にかかって死にました。

この聖書箇所は、徹底的に悲惨さが語られる中で、その中心の一番低いところに、「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。」と歌われているのです。この構造は、まさに悲惨な現実の一番低いところにまで神は降り、その悲惨さを自ら受け、苦しむ者と共におられる姿を表しています。このようにキリストを証ししているのです。

2022 年度、まだまだコロナにより厳しい現実はもうしばらく続くと思われまます。苦しみのどん底までキリストが降り、苦しむ者と共に歩み、その重荷を共に負い、そしてすべての人の罪を身代わりとして十字架にかけられた主がおられることを覚えたいと思います。キリストは十字架に死にましたが、それで終わりではなく 3 日目に復活され生きて働いておられます。聖霊によって、今も私たちと共にいて働いておられるのです。このキリストの光を証しする一年としたいと思います。

「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる。」（哀歌 3 章 22～23 節 a）とあります。「それは朝ごとに新たになる」と約束されています。キリストから、尽きることのない命の水が流れ出るのです。そのために大事なことは、当教会の「教会設立 50 周年教会宣言文」の (2) にある「常に祈り、奉仕を志します」を今年度頭に置きたいと思ひます。

朝ごとにみ言葉と祈りの時を大切にしたいと思ひます。毎朝み言葉をいただき、そのみ言葉に基づき祈る。わずかな時間であっても、朝の聖なる時間を大切にし、そこから働きの方向性を受け取って一日を過ごすことを目指したいと思ひます。

教会の働きとしては、しばらくコロナ感染状況の様子を見ながら、活動の開始を見極めていきたいと思ひます。そのため役員会でコロナの感染状況を鑑み、活動を決めていきます。